

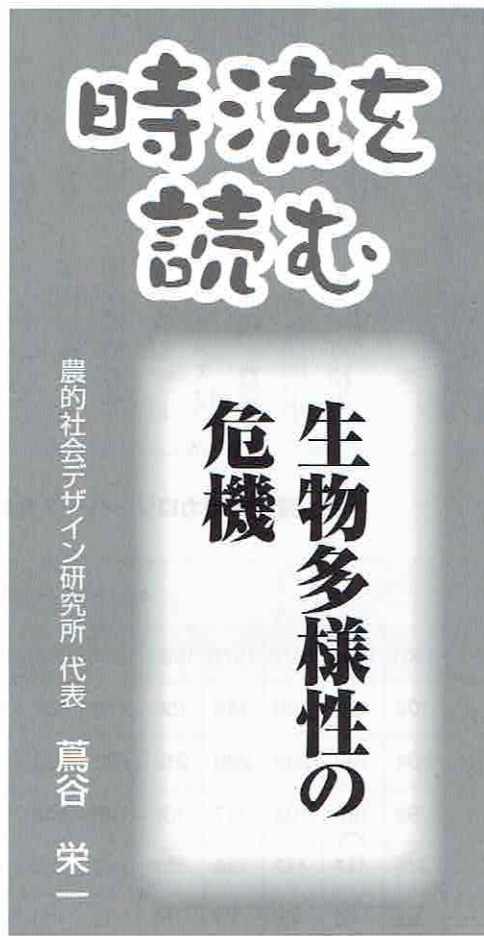
地球の限界

近時、「プラネタリー・バウンダリー」という言葉を耳にするこ
とが増えた。これは「地球の限界」
と訳されているが、環境学者ヨハ
ン・ロックストロームの研究チー
ムが2009年に提唱した概念
で、「経済発展や技術開発により、
人間の生活は物質的には豊かで便
利なものになった一方で、人類が
豊かに生存し続けるための基盤と
なる地球環境は限界に達しつつあ
る。」として、それを示す次の9
つの指標があげられている。

- ①生物圏の一体性(生態系と生物多様性の破壊)、②気候変動、③海洋酸性化、④土地利用変化、⑤持続可能でない淡水利用、⑥生物地球化学的循環の妨げ(窒素とリンの生物圏への流入)、⑦大気エアゾルの負荷、⑧新規化学物質による汚染、⑨成層圏オゾンの破壊、である。
- 気候、水環境、生態系などが持つレジリエンス(回復力)の限界を超え、不可逆的な破壊的变化が起こり、元に戻ることが困難にな

るティッピング・ポイント(臨界点)が迫っているとして早急なる対策を求めている。注目度の高い気候変動についてはティッピング・ポイントを目前にしながらもまだ超えていない段階だからこそとして、緊急かつ効果のある対策

食料システム戦略を打ち出し、そのねらいとして気候変動対策が強調されているが、あわせて生物多様性の保全・再生も掲げられている。しかしながら、生物多様性が失われつつあることは理解・実感しつつも、これを自らの問題とし



を呼び掛けているものであるが、生物多様性やリン、窒素については既にティッピング・ポイントを超えているとしている。

重要な里地山

農水省は2021年にみどりの

てどう受け止めていけばいいのか正直なところ考えあぐねっていた。たまたまある懇親・交流の席で日本自然保護協会の藤田卓氏にお会いしたことをきっかけに、ある勉強会で基本法見直しに関連して生物多様性についてお話をうかが

う機会を得たが、その共有である。その話の中で最も印象に残ったのが、里地里山の重要性である。農地は人が手を加えて維持管理する二次的自然であり、そこには生物多様性を基盤とする多面的機能をも含むさまざまな生態系サービスが存在する。里地里山は国土面積の約4割を占めており、そこで耕作放棄地の増加が生物多様性の危機を招いている。農地を持続的に管理・利用することでしか里地里山を守り、生物多様性を保全できない。したがって、基本法見直しの中に、環境対策を強化していくことが欠かせない、とする。

農地という、共生の場

生物にとって農地は湿地や草地の代替環境であり、その代替環境を維持していくことは食料安全保障の維持に直結する。植物や昆虫と同じように人間も代替環境である農地という「場」をはさんで共生しているという当たり前の事実を目を開かされた思いだ。